

「映画が街を変えるーフィルム・コミッションの成功モデルとしての神戸」

甲南女子大学 日本語日本文化学科 講師 津田なおみ

はじめに

映画の撮影において、フィルム・コミッションの存在は今や不可欠なものとなっている。フィルム・コミッションとは、映画やテレビドラマ、CM、配信などの映像作品の撮影を支援し、地域の魅力を国内外に発信することを目的とした公的機関または民間団体である。多くの場合、自治体を中心となって組織化され、地域の文化的・経済的振興を図る役割を担っている。フィルム・コミッションの活動の根幹を成す原則は3つある。①金銭の収受を伴わず無償で制作支援を行うこと、②窓口を一本化し、ロケーション情報の提供や公的施設の利用に関する許認可の調整を行うこと、③作品内容を問わず支援を行うことが挙げられる¹。具体的な業務としては、ロケーションの提案、撮影許可手続きの調整、地元スタッフやエキストラの手配、宿泊・交通手配の支援など、多岐にわたる。こうした支援を通じて、映画やドラマ CM、配信映像などを介して地域の知名度や地域愛着度を向上させ、観光客の誘致につなげることで、直接的・間接的な経済効果を生み出し、地域活性化を行うまで視野に入れて業務を担う。

日本におけるフィルム・コミッションの制度化は、2000年に発足した「フィルム・コミッション設立研究会」に端を発する。この研究会のもと、大阪、神戸、北九州、横浜が支援団体を設立した。それ以降、全国各地で整備が進められた結果、2021年、日本国内のフィルム・コミッションは約350団体であり、国内の数としては世界最多となっていた²。

近年は、配信サービスの普及に伴い、制作されるコンテンツの総数が増加していることもあり、フィルム・コミッションによる撮影支援の件数も伸びている。特に大規模な作品においては、作中に登場するアイテムの情報収集や、ロングショット撮影用の資料映像として、ドローンを用いた事前撮影を行うなど、撮影準備に多くの時間を費やすケースが増えている。また、従来の実写作品のみならず、アニメーション作品の支援も活発化している。そういったアニメーションでの最近の成功事例としては、2024年、はこだてフィルム・コミッションが撮影支援した、劇場版『名探偵コナン 100万ドルの五稜星（みちしるべ）』だろう。北海道、函館が舞台になり、シリーズ最高の興行収入を上げ、五稜郭や函館山展望台などを「聖地巡礼」するファンが押し掛けた。実写映画では、同年、横浜フィルムコミッションが撮影支援した映画『帰ってきた あぶない刑事』でロケ地の観光・周遊企画³を実施し、往年のファンを引き付けることに成功した。

上記の2つの事例はどちらも官民一体となった大がかりなキャンペーンをしたことも功を奏している。『名探偵コナン 100万ドルの五稜星』においては、この作品のために、「函館×名探偵コナン」特別イベント実行委委員会を設立し、キャラクターの等身大パネルを置くフォトスポットの設置、作品のロケ地を地図と写真付きで紹介するロケ地マップ、キャラクター声優が電車の車内アナウンスをするなど、経費を拠出し取り組んだことが大き

¹ ジャパン・フィルムコミッション「フィルムコミッションの活動について」 文部科学省サイトより

https://www.mext.go.jp/sports/content/20210114-spt_stiiki-000012156_04.pdf (2025年2月7日閲覧)。

² 「地域と映像業界、共栄へ＝関根留理子 ジャパン・フィルムコミッション事務局長」毎日新聞 2021年1月7日朝刊(東京)

<https://mainichi.jp/articles/20210107/ddm/004/070/009000c> (2025年2月7日閲覧)。

³ 「歴代のあぶない刑事劇場版 ロケ地横浜を巡ろうキャンペーン」横浜市観光情報サイトより https://www.welcome.city.yokohama.jp/blog/detail.php?blog_id=278 (2025年2月7日閲覧)。

い⁴。『帰ってきた あぶない刑事』も同様である。

しかしながら、こうしたイベントや作品との企画タイアップなどの精密な準備が可能なフィルム・コミッションはまだ多くはない。その理由の一つとして、担当者が少ない地域が多いことがあげられる。年々、支援する作品の件数は増加しているものの、各フィルム・コミッションの担当者数の平均は 0.8 人と 1 人に満たず、多くが観光業務などとの兼任で運営している⁵。このため、ロケ支援以外の活動に十分な時間を割くことが難しい。フィルム・コミッションが誕生して、25 年。地方創生事業の一環としてのロケ誘致・支援は、産官学民の連携、雇用の創出、観光集客、文化振興に繋がることを期待し、国内に数多くのフィルム・コミッションがおかれてはいるが、全てのフィルム・コミッションが成功しているとは言い難い。映画制作サイドへの売り込みや、市民への理解など、撮影支援機能がなかなか進まない地域も多い。

そこで、本稿では、初期の段階でフィルム・コミッションを立ち上げ、2023 年度に過去最高となる 4 億円超の直接経済効果⁶をもたらした、映画制作者からも評価が高い、神戸フィルムオフィス（以下、「神戸 F O」とする）を取り上げて、どのような取り組みをしているのかを振り返ってみる。さらに神戸 F O は、「ひょうごロケ支援 Net」、「淡路島フィルムオフィス（以下、「淡路島 F O」とする）」とも連携しながら業務を進めている点にも注目したい。なお、本論文では、フィルムオフィスの理解を深めるため、当事者である神戸 F O の土屋千佳さん⁷と、淡路島 F O の津守会美さん⁸のインタビューを行い、その発言も引用する。

第 1 章 神戸フィルムオフィスについて

(1) 設立の背景

神戸 F O が設立される以前、神戸市内での映画撮影の対応は市の観光課が担っていた。神戸は戦前から映画撮影が盛んな地域であり、神戸を舞台としている作品は多くあった。しかし、映画制作を専門的に支援するフィルム・コミッションが存在しなかったため、撮影許可の取得やロケ地の確保など、制作側にとっての課題は多かった。

そうしたなか、1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災によって、神戸は大きな被害を受け、市内各所が壊滅した状態となった。震災直後、多くの映像が災害の悲惨さを伝えるものばかりであったが、復興した神戸の姿を映像で発信することが重要であるとの考えから、ある神戸市職員が「全国に復興した神戸の美しい街並みを紹介し、その魅力を

⁴ 「コナン特別イベント開催へ実行委設立 函館市など」函館新聞 2024 年 1 月 5 日電子版

<https://digital.hakoshin.jp/news/politics/113042> （2025 年 2 月 8 日閲覧）。

⁵ 特定非営利活動法人 ジャパン・フィルムコミッション「日本国内におけるロケ撮影の現状と課題」首相官邸サイトより

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/location_renrakukaigi/dai1/siryou2.pdf （2025 年 2 月 7 日閲覧）。

⁶ 直接効果は撮影クルーの宿泊、飲食費のほか、セット設営にかかる資機材調達費などの合計金額である。2023 年度は 165 作品を支援したが、最も経済効果が大きかったのは、動画配信サービスの「シティ・ハンター」であり、この作品だけで 1 億 3 千万円がかけられた。（「ロケ誘致：神戸ロケ誘致、4 億円超「シティ・ハンター」など撮影 経済効果」毎日新聞 2024 年 5 月 26 日 21 頁）。

⁷ 特定非営利活動法人ジャパン・フィルムコミッション理事、一般財団法人神戸観光局内 神戸フィルムオフィスに勤務。現在、フィルムコミッショナーとして活動。

2024 年 10 月 25 日 神戸 F O 事務所にてインタビュー。

⁸ 2009 年から淡路島フィルムオフィスのコーディネーターとして活動。

2025 年 1 月 23 日、リモートオンラインにてインタビュー。

知ってもらうことで、市民に元気を分けていきたい」と考えた。そして、1998 年、東京でテレビ制作に携わっていた田中まこ氏と出会ったのが発端である。田中氏は、中学・高校を兵庫県西宮市で過ごし、その後アメリカ・東京で生活した経験を持つ。彼女によれば、映画文化が浸透しているアメリカでは、街中のロケーション撮影が日常的に行われていたが、日本では撮影許可の取得が困難で、番組制作においてもなかなか撮影しづらいことを痛感していた。神戸市職員の話を聞いた田中氏は、「それなら映画撮影の支援をする FC を立ち上げてはどうか」と打診した。こうして、神戸 FO は設立へと動き出した。FO の運営には、公的機関や市民の協力が必要である。そのため、設立前から、神戸市消防局や兵庫県警に対する事前説明会を重ね、理解と協力を求めた。また、アメリカフィルム・コミッションで活躍する専門家を日本に招き、運営システムや実務についての指導を受けた。国際的な研修にも参加し、約 2 年の準備期間を経て、神戸 FO は、2000 年 9 月 13 日、神戸国際観光コンベンション協会内に設立された。ところが、始動すると、想定以上に仕事が舞い込んだ。担当は兼任も含め、10 名がかかわり⁹、相次ぐ撮影依頼に意向に沿った場所を紹介することになる。田中氏は当初、神戸フィルムオフィスの設立を支援するのみの役割を担っていたが、映画制作に精通し、なおかつ行政とも制作側ともやり取りできる人物となると、神戸市では適任者がおらず、「適任者が見つかるまで」の条件で、田中氏は代表を継続することとなった¹⁰。

(2) 神戸 FO が成功しているポイント——持続可能な戦略と地域社会への貢献

全国にフィルム・コミッションが約 350 団体もあるなかで、神戸 FO は、初期から成功事例を作ってきたこともあり、映画制作者からの信頼が厚い。また、映画撮影の支援を通じてシビックプライド（市民の誇り）も醸成しているといわれる。ここでは、神戸 FO が映画制作者の要望に応えるためにどのような戦略を用いているのか。さらに、制作者と行政の間でどのような調整役を果たし、地域連携を通じてどのように映像制作支援の可能性を広げているのか。神戸 FO の活動を中心に、映画制作と地域社会の関係について検証する。

① シビックプライド——都市の認識と市民意識の形成

インタビューした土屋千佳氏によると、神戸 FO が初めて映画作品の支援をしたのは、2001 年公開の『走れ！イチロー』であった。芦屋市出身の大森一樹監督作品である。ロケ地となったのは、ほっともっと field 神戸（旧グリーンスタジアム神戸）、ハーバーランド、元町高架商店街、南京町、メリケンパークなど、神戸の名所だった。各セクションと交渉しながら、同時に、神戸 FO は、設立から市民の意識を育てることに力を注いだ。神戸 FO への認知を上げるためと、市民への理解を求めるために通行人などで参加する市民エキストラを公に募集したのである。『走れ！イチロー』はタイトルにある通り、元メジャーリーガーのイチロー選手をモチーフに描かれるドラマであった。募集したのは、野球観戦している観客役。オリックスブルーウェーブが本拠地としていた球場での撮影である。1995 年、震災からの復興を目指し、オリックスの選手たちは「がんばろう K O B E」を合言葉に戦い、その年パリーグでの優勝を手にしていった。市民には自分たちを元気づけてくれたオリックスの本拠地での撮影というのも響いたと推察する。当時、エキストラとして参加したある夫婦は、「メジャーリーグに行く前のイチロー選手が出場する試合をグリーンスタジアム神戸に見に行きませんか？」という新聞広告に引き付けられた。¹¹という。ある参加者は「終了予定を随分オーバーして、とにかく寒かった。ひたすら待ったという記憶が強い。（中略）10 数年後の特別上映会で ポートピアランドなど当時の姿が映っていて映画は街の記録だと気づいた。」と言った。また、ある夫婦は、「寒い冬のロケで、待ち時間も長く、自然と隣に居合わせた人と話が弾みました。帰りには、すっかり意気投合して、一

⁹ 「ロケ呼んで 地域 PR 神戸・愛媛・映画に熱視線」朝日新聞 2001 年 5 月 21 日夕刊 1 頁。

¹⁰ 『Venture link：ニッポンの中小企業を元気にする経営情報誌』20 巻 11 号（2006 年）68-71 頁。

¹¹ 「ひとり上手の趣味の時間 エキストラ神戸フィルムオフィス」『毎日が発見』（KADOKAWA、2005 年）17 頁。

緒に熱燗を飲みに行ったんですよ。」とコメントを残し、それ以降、も、エキストラ登録を継続しているようだ¹²。結局、この「走れ！イチロー」のエキストラには、1,000 人の市民がボランティアで参加をした¹³。「神戸に住んでいると、わざわざ異人館に出かけることなどないものですよ。それが大勢でバスに乗って出かけてみると、とても新鮮だったんです。まるで団体旅行に参加しているような気分です。」と話す参加者のひとり。さらに 2006 年公開の映画『ウルトラマンメビウス&ウルトラ兄弟』では、約 4 0 0 人の神戸市民が真冬のポートアイランドに集まり、撮影に参加した。

実は市民がこれほど、映画撮影に参加することを楽しんでいる背景には、土屋氏もインタビューの間、何度も語っていた地域に対する愛着や誇りといった「シビックプライド」¹⁴があるからだろう。神戸は海も山も近く、旧居留地や南京町など多彩な表情がある。自分が出演した映像作品のなかに現れる、自分の街の美しさや面白さを知る満足感。自分が散歩したり、ショッピングしたり、食事をする場所が映画に映る。文化財に指定されていなくても市民にとっては宝物。自分の出演した映画に自分の街が映る。しかも照明や美術によって輝きを増し、有名人がその場所を駆け抜ける。その喜びが「シビックプライド」に繋がると考えていいだろう。もともと神戸市民が自分の街に誇りを持っているからこそなのだが、それも含めて、神戸 FO は、設立初期の段階から、映画撮影がやってくることは迷惑なことではなく、未来の街を築くことでもあると、住民への説明を続け、映画ファン増大のためのフォトコンテストなどを開催したり、代表自らがさまざまな場所で講演を行い、ロケ協力などを積極的に市民に働きかけていたことも大いに関係しているであろう¹⁵。

「撮影候補の場所が決まると、住民と事前に意見交換し、迷惑がかからない時間帯や場所を選ぶので円滑に撮影できる。トラブルがないので警察や行政も協力的」¹⁶と田中氏は言う。

さらに、シビックプライドを重要としている事例として、2006 年公開の阪神淡路大震災のシーンが描かれる『ありがとう』という映画がある。地震で商店街が全焼するシーンや避難所のシーンを神戸で再現できないかと依頼された。震災後 10 年が経っていたが、制作側や行政と話し合いを重ね、「市民感情を考えるとそれはまだできない」という結論に至った。多くを長田区で撮影したが、そのシーンだけは別の場所で撮影したと土屋氏は語っている¹⁷。市民感情に寄り添った結果である。現在は、撮影交渉などで街の人たちと話すときもみんな「神戸は、よく映画に出とるなあ。」とうれしそうに話す。震災を経た神戸で撮影された作品が、国際的な映画祭で上映され、賞を取る。そういったことが多くの人々を喜ばせ、シビックプライドを育んでいる。

ここまで、市民を巻き込んで撮影支援ができるのは、創設者の田中氏が神戸市民に対して、深い愛情をもって接し、映画撮影は楽しいものなのだという概念を伝え続けてきたからである。そういった田中氏の思いは、2016 年から代表を引き継いだ松下麻里氏にも受け継がれている。「判断に迷った時は、「神戸の人のためになることか」と考えること。」¹⁸という、この思いが神戸市民にしっかり伝わっているからに他ならない。どうしてもフィルム・コミッションとしては、観光効果や、経済効果などの数字を追いかけてしまいがちだが、「観光の PR だと思ってやったことがない。」「いい映画を神戸でたくさん撮ってほし

¹² 「私と神戸フィルムオフィス みんなの声 Q&A」『神戸フィルムオフィス 20 周年記念』（神戸フィルムオフィス（一財）神戸観光局、2020 年） 7 頁。

¹³ 前掲注 12・7 頁。

¹⁴ シビックプライド（Civic Pride）とは、地域や自治体に対する市民の誇りや愛着、地域社会に貢献する意識を指す言葉である。起源は 19 世紀のイギリスで、商工業の発展に伴い多くの都市が生まれ、市民階級が力をつけ始め、市民自らが住んでいる都市を「誇りあるものにしよう」とする動きが発端である。

¹⁵ 木田悟「フィルムコミッションの実態と地域活性化への考察」日本建築学会技術報告集 第 15 巻第 29 号（2009 年）292 頁。

¹⁶ 「ロケ地誘致 活動多彩に」日本経済新聞 2009 年 9 月 15 日 29 頁。

¹⁷ 「(阪神淡路大震災 26 年) 映画、伝える街の姿」朝日新聞 2011 年 1 月 17 日朝刊 3 5 頁。

¹⁸ 「田中代表が退任 神戸フィルムオフィス」朝日新聞 2016 年 4 月 3 日阪神版 2 7 頁。

い。」¹⁹という思いで、市民への説明や協力に心を砕く。その姿勢が市民に伝わっているからこそ、シビックプライドが育成される。

② 映画制作者の意図を組む一映像表現の解釈

土屋氏によると、神戸FOは、映画制作者の間では「困ったときの神戸」と言われているそうである。それには理由がある。神戸FO立ち上げから1年後の2001年、まだ無名だった行定勲監督の『GO』の撮影に関する相談がきた。「どうしても映画冒頭に地下鉄のシーンを入れたい」という。関東では引き受けてくれるところがなかったらしい。これまで、日本国内で安全面や人材確保（終電後の撮影になるため）などの難しさから、国内では地下鉄で撮影がされたことはなかった。しかし、神戸FOは、市の事業として成り立っている点を活かし、神戸市交通局と交渉する。最初、地下鉄の担当者は「ありえない」という態度だったが、FOスタッフの熱意に負け、「どうやればできるのかを一緒に考えてみましょう」となった。結果、終電後の地下鉄の駅を使用し、電車を動かす必要から2名の運転士も参加し、撮影を実現した²⁰。その後、『GO』(2001年)は2002年の日本アカデミー賞でアニメーション以外のすべての部門で受賞し、行定監督は有名になった。これがきっかけとなって、数か月後に映画『リターナー』(2002年)で、神戸市内のカーチェイス、公道を封鎖しての爆破、ヘリコプター飛行など派手なアクションシーンが撮影された。この作品を演出した山崎貴監督は、「『ヘリの上で機関銃を乱射する場面をもう一台のヘリから撮影するということまでやらせてもらえた。映画撮ってるぞ!』とすごく興奮したことを覚えている」²¹と後に語っている。こういったことにより、映画関係者の間で「駆け込み寺」、「困ったときの神戸」などと言われ、それは20年以上たった今でも「神戸ならやってくれるかも」という問い合わせがよくあるという。土屋氏は神戸FOの立ち上げから3年後に所属したということだが、彼女が初期に関与した作品の中で、特に評価が高いもののひとつに、『僕の彼女はサイボーグ』(2008年)がある。この作品は『猟奇的な彼女』(2001年)をヒットさせた韓国人のクァク・ジェヨン監督作品であった。当時、この作品の準備稿が神戸FOに送られてきて、「台本を読んで、この作品が神戸で撮影できるか検討してみて」と打診があったという。内容はラブストーリーだが、カークラッシュなどのシーンがあった。『GO』や『リターナー』などの過去の撮影支援が大いに影響し、「神戸だったら撮れるに違いない」というような雰囲気があったという。土屋氏は、神戸の中心地、元町の交差点で撮ると面白いと考え、警察に尋ねに行った。すると、「交差点の近隣ビル、テナント、住宅から撮影に協力するという承諾書をもってきてほしい」という返答であった。土屋氏は、一件ずつ説明に行き、200を超える承諾書を揃えたそうである。そのかいあって、その交差点の道路を、午後8時から午前6時まで封鎖し、カークラッシュを撮影することに成功した。この時、近くの大丸神戸店の従業員50人がエキストラとして出演し、店内を閉店後から翌朝まで撮影場所としての提供もあった。県警も「街のにぎわい作りにつながると考え、柔軟に対応した。」²²と話す。

土屋氏は、近年の支援では、空音央監督の『HAPPY END』の撮影の支援が心に残っているという。実は、空監督を神戸FOに紹介したのは、自身も神戸に住んだことのある濱口竜介監督だった。濱口監督は、神戸で撮影した『スパイの妻』の脚本を手がけ、第94回アカデミー賞の作品賞などを受賞した『ドライブ・マイ・カー』の監督である。それ故、神戸FOのことを良く知っていた。「神戸なら引き受けてくれる」という確信のもと、空監督を紹介した。この作品のロケ地候補は高校だった。学校はハードルが高い。廃校でない限り、昼は学生が通学し、休日は部活動がある。なかなか現役の高校で、ロケに使用させてくれるところは少ない。こうしたことから元学校で、現在は公民館として使用されている場所を推薦した。ところが、その後、土屋氏は、撮影に協力してくれる高校を

¹⁹ 「フィルム・コミッションをめぐる3つの視点 谷川建司+田中まこ+荒木美也子」キネマ旬報2003年8月上旬特別号140頁。

²⁰ 「[ステージ] 映画都市・関西へ「アクション!」ロケ誘致に警察・消防との信頼」読売新聞2001年10月26日夕刊大阪3頁。

²¹ 前掲注12・3頁(山崎貴「わたしと神戸フィルムオフィス」)。

²² 「(シネマの時代 淀川長治生誕100年:7) 気風 次世代育む港町の懐」朝日新聞2009年1月9日朝刊 30頁。

2 校みつけた。すでに公民館で撮影することを前提にイメージを膨らませていた監督に、「ある高校を見に行きませんか？」と、半ば強制的に候補となった高校を案内した。すると、空監督はこの高校を気に入る、撮影地が公民館から土屋氏の提案した高校へと変更になった。結果的に、学校側も映画制作を通じて学生に学びの機会を提供できるという視点から、撮影が実現した²³。

空監督は、「最初は別のロケーションを見ていたんですが、そこだと机や椅子などの備品を用意しないといけなくて、そんな時に神戸フィルムオフィスの方が「近くにある学校が夏休み中だから（備品を）借りれるかもしれない」と提案してくれて。一度見にいったら、もう完璧な、まさに僕が求めているようなロケーションでした。元々学校じゃない場所を高校に仕立て上げようとしても、やっぱりどこか作り物になってしまうので、今回この 2 校で撮らせていただけたことに本当に感謝しています。（この 2 校がなければ）この映画はできなかったと言っても過言ではありません。」²⁴と映画公開時の舞台挨拶で話している。

決まりかけていても、とことん探し出してより良いものを提案する。そのスタンスが制作者からの信頼を勝ち取っている一助になっている。

③ 制作映像業界から求められる選択肢と戦略について

しかし、神戸 FO の評価が高いのは、単にこうした難しい案件をクリアする能力や、制作陣の意向にあう場所を諦めずに探す姿勢が貫かれているからだけではない。映画のロケ地は、映画制作者の意図やイメージに叶うかどうかのポイントであって、フィルム・コミッションが関心を持たない場所や景観であってもロケーション撮影の対象となる可能性を有していることになる²⁵。例えば、「使われなくなったトンネルや廃墟、何の変哲もない住宅、（中略）「猫が捨てられていそうな街角」など、突拍子もないリクエスト」²⁶もあるという。そこで、日頃からロケ地になりそうな場所をみつけた時、「もし映画の撮影をお願いしたら、協力してもらえるか」を前もって打診する。また、警察に「協力しましょう」と言ってもらえるように説明会を丁寧に開く。さらにロケハンの写真の撮り方をスタッフ間で共有し、正面からだけではなく、あとで切り張りできるように 180 度まわって撮ったり、建物の方位、向かいの建物の高さ、道幅、光の当たり方（何時から何時まで日照があるか）といった細部に至るまで、調べて事前準備をする²⁷。また、制作者から絵コンテや脚本をもらい、イメージに合いそうなロケ場所を案内²⁸し、時には、制作者の意向にはない場所も、準備段階で目星をつけておいて、時間があれば案内する。場合によっては監督が気に入り、ストーリーが膨らむ場合があるからである。2019 年、『スパイの妻』のロケーション・ハンティングがあった際、制作者から聞かされた条件には合わなかったが、「ほかのシーンで使えるかも」と、1908 年頃に建てられたコロニアル・スタイルの洋館、旧グッケンハイム邸を紹介した。すると監督は気に入る即決したという。この洋館は、主人公夫妻の自宅として撮影が行われた²⁹。このように神戸が映ることで、より良い映画になると判断した時には、予定外の撮影支援をする。

また、神戸 FO は、実際の撮影時には、単に使用許可を取るだけでなく、野次馬の整理

²³ 2024 年 10 月 25 日 神戸 FO 事務所にてインタビュー。

²⁴ 「ロケ地・神戸に凱旋！映画『HAPPYEND』空音央監督 Q&A トークイベント 現地レポート」 KissPRESS2024 年 10 月 4 日 <https://kisspress.jp/articles/52465/> （2025 年 2 月 9 日閲覧）。

²⁵ 木村恵「フィルムツーリズムからロケーションツーリズムへメディアが生み出した新たな文化」名古屋大学大学院国際言語文化研究科・メディアと社会 第 2 号（2011 年）113-128 頁。

²⁶ 栗野仁雄「人間探訪 松下麻里 神戸フィルムオフィス代表 神戸の街と魅力を映像を通して伝えたい」潮 2016 年 11 月 130~135 頁。

²⁷ 前掲注 19・140 頁。

²⁸ 「[リーダーな女たち] 神戸フィルムオフィス代表・田中まこさん」毎日新聞 2003 年 5 月 23 日夕刊（東京）7 頁。

²⁹ 「ロケ地・神戸の存在感「スパイの妻」黒澤監督・ベネチア銀獅子賞/兵庫県」朝日新聞 2020 年 9 月 22 日朝刊 21 頁。

を含め、あらゆる支援と配慮を行う。撮影にはスタッフが全日程に同行し、トラブルの回避に努めているようだ。土屋氏の話によれば、木村拓哉主演の『HERO』（2005 年）の撮影の際に、ロケ場所の兵庫県公館にファンが押し寄せたために、道路に大きな暗幕を張って撮影が見えないようにしたと語った。そのような様々な配慮の上に、関係部署、警察や消防、市民との信頼を築いている。

④ 映像制作における倫理規範とガイドラインの必要性

だが、神戸 FO は、制作側ばかりを優先しているわけではない。初期の代表田中氏が映像制作を経験し、制作側の立場が良く理解できていたこともあり、両方の言い分を仲介できる立場にいた。例えば道路上の撮影で、警察に協力を頼みながら、約束の撮影時間をオーバーしたら今後の協力は受けない。余裕をもって時間を告げ、制作陣には「時間厳守」を求める。「制作側は、役所の事情を知ろうとしませんよね。自分が（映像制作の立場から）180 度反対側の役所側に入ってみて（中略）わかったことがたくさんあるんですよ。「実は役所にはこういう事情があるのよ」と制作者に説明すると「なんだ、だったら言ってくればいいのに」となってみんな結構仲良くなるのよ」³⁰と言う。そして、「最初はたった数メートルの歩道からはじめて、絶対にトラブルをおこさない（ようにする）。とにかく一番やっかいなのは、制作者がおこすトラブルなんですよ。制作者の足を引っ張っているのは、ほかの制作者なんですね」³¹と話す。両者の関係を円滑にするため、神戸 FO は撮影に直接関係しない部分にまで気を配る。例えば、「普段はジーパン姿の制作者に対し、「役所の人に初めて会うときはネクタイを着用してほしい」と依頼する。また、役所の職員にも現場に足を運んでもらい、制作者の仕事を理解してもらう」³²など、双方の歩み寄りを促す努力を続けているのである。

神戸 FO は、単に撮影環境を整えるだけでなく、制作者と行政が敵対関係にならないよう配慮し、その調整役を果たすことも視野に入れているのである。

⑤ 地域連携による映像制作支援の可能性を探る「ひょうごロケ支援 Net」

神戸は、海と山に囲まれ、都市機能がコンパクトに集約され、撮影地への移動が容易である。また政令指定都市でありながら人口密度が過度に高くなく、撮影に適した環境が整っていると土屋氏は言う。しかし、神戸 FO の立ち上げで制作者からの問い合わせが増えるにつれ、悩みも生まれた。ある映画監督から、「海に見えるペンション」とリクエストされても、そういった建物や、施設、街並みが全て神戸に揃っているわけではない。そこで、2006 年、神戸 FO は、自治体間の連携が不可欠であることを兵庫県内の各自治体に訴え、フィルム・コミッション 8 団体と 37 市町で「ひょうごロケ支援 Net」を立ち上げ、より包括的なロケ支援体制を構築した。兵庫県内の他地域とも連携し、広域での撮影支援を進め、適材適所の活躍で地元も盛り上げようというものである。これまでに、『火垂るの墓』（2008 年）や、『THE LEGEND & BUTTERFLY』（2023 年）など、知名度の高い作品の撮影を支援してきた。これにより地域の認知度向上や観光スポットとしてのプロモーション効果があった。『火垂るの墓』でロケ地となった秋谷池（西脇市）には映画の碑が建ち、『THE LEGEND & BUTTERFLY』では篠山城跡（丹波篠山市）、国宝・朝光寺（加東市）や明石城（明石市）、杉ヶ沢高原（養父市）でもロケが行われた。地元から応募し、エキストラ出演

³⁰ 前掲注 19・138 頁。

³¹ 前掲注 19・140 頁。

³² 「【もっとロケを】レインボーブリッジで撮りたい（中）神戸の実績」産経新聞 2004 年 6 月 28 日朝刊（東京）3 頁。

した市民らもいた³³。現在は10フィルム・コミッションが参加している³⁴。こうして神戸から始まったフィルム・コミッション活動は、広域で連携しあうことによって、地域のブランド化や文化コンテンツの発信に大きく貢献している。

⑥ 「ひょうごロケ支援 Net」から派生した、養父市におけるロケ誘致成功の功績

ここでは「ひょうごロケ支援 Net」が発足し、各地域で映像制作の誘致活動が本格化したなかで成功した養父市の事例を記しておく。2021年秋に、木村拓哉・綾瀬はるかが出演する映画『THE LEGEND & BUTTERFLY』の撮影において、養父市の杉ヶ沢公園が選ばれ、織田信長と濃姫の鷹狩りのシーンが撮影された。この場所が選ばれたのは、電柱などの人工物が映らない広い草原が決め手になったという。またネット配信ドラマ『カンニバル』の撮影でも明延鉱山探検坑道と、市指定文化財の住宅「大庄屋記念館」で撮影があった。養父市においてロケ撮影が最近頻繁に行われるようになった背景には、行政の積極的な支援体制がある。特に、ひょうごロケ支援 Net から、ロケ地の紹介依頼が届いた際、迅速かつ詳細な情報提供を行ったことが、制作会社との関係構築につながったと考えられる。これに勢いづいた養父市では、2023年1月に東京で開催された「全国ロケ地フェア」にオブザーバーとして参加した。同フェアは、ジャパン・フィルムコミッションが主催し、映画コミッション担当者と映像制作者が全国注目し、ロケ地マッチングについて情報交換を行う場である。この場で、養父市の文化財施設である「大庄屋記念館」などをPRし、「行政管理施設や文化財は撮影に使いにくい」という映像制作者の意識を変えようとしている³⁵。このように一度成功すると、市は積極的に撮影支援に乗り出す。こういった成功事例が地域で増加すると、地域社会と映像産業の共存関係が促進され、地方の経済が活性化する可能性が高いのではないかと考える。

2章 淡路島フィルムオフィスの設立の流れと地域振興策と神戸 FO との連携

ここでは、神戸と連携しながら撮影支援を行っている淡路 FO について考察していく。兵庫県内のフィルム・コミッションはそれぞれ独自の地域性を生かし、ロケ支援をしている。なかでも、神戸 FO と連動して協力体制を強くとしているのが淡路島 FO である。神戸 FO 立ち上げから5年後の2005年10月に設立され、これまでに150件以上のロケ誘致および支援を行ってきた。代表を務めるのは淡路 FO コーディネーターの津守会美氏である。津守氏はもともと大阪でパソコンのインストラクターとして働いた後、故郷である淡路島に戻り、淡路花博記念事業協会や淡路島くにうみ協会に勤務した。その後、2009年より、淡路島 FO のコーディネーターとして活動を開始した。この章では、津守氏のインタビューのコメントから検討していく。

(1) 淡路島 FO の設立と広域を意識した連携

³³ ひょうごロケ支援 Net が発足する前に神戸 OC と姫路 FC 同士が提携したのは、2001年の『リターナー』である。他に、日本ロケ実現において重要な役割を果たしたのは、『ラストサムライ』（2003年）である。当初、撮影は、ニュージーランドにセットを組む予定であったが、エドワード・ズウィック監督が来日した際に、姫路市内の圓教寺などを売り込んだ。主演のトム・クルーズが宿泊するホテルはスイートルーム、ホテルからロケ地はヘリコプターで30分以内という条件をクリアし、2002年にハリウッド映画として久しぶりに日本ロケを実現させた。このロケによって地元にもたらされた直接的な経済効果は約1億円と推定されている（鈴木嘉一『わが街再生－コミュニティ文化の新潮流』（平凡社、2013年）130頁）。

³⁴ ひょうごロケ支援 Net <https://hyogo-film.jp/about/> （2025年2月10日閲覧）。

³⁵ 「ロケ地は養父市、これからは商工観光課に担当者」朝日新聞 2024年3月26日朝刊（但馬）25頁。

① 設立の流れ

淡路島 FO は、「先にできた神戸 FO に助言をいただきながら淡路青年会議所など島内の様々な団体が協力して」³⁶と津守氏も話している通り、神戸 FO からサポートを受けながら立ち上がった。設立当初は青年会議所に事務局が置かれていたが、現在は一般財団法人淡路島くにうみ協会内に事務局を構えている。同オフィスには、大阪や東京のみならず海外の映画制作会社からも問い合わせが寄せられ、ロケーションの候補地を紹介する業務を行っている。年間 60～70 件のオファーがある中で、実際に淡路島でロケが実施されるのは約 20 件ほどである。

② 淡路島に求められている風景とは

淡路島は、豊かな自然や海の美しい景観が特徴であり、そのイメージを求める映画制作関係者が多い。例えば、淡路島の農業や漁業を支える若者たちを描いた映画『種まく人々にうみの郷』（2015 年）では、島の特産である玉ねぎや海苔の養殖などを撮影した。また、ため池を維持管理するための伝統手法の「かいぼり」を取り上げ、淡路島オールロケを行った。演出した篠原哲雄監督は、淡路島のロケーションの素晴らしさを高く評価しており、特に京阪神地域から 2 時間程度でアクセスできる点を大きなメリットとして挙げている。特に、淡路島は海に囲まれ、対岸に何も見えないロケーションが多く存在するため、高台からの撮影を望む制作者が多い。他にも、島内には安藤忠雄建築がいくつかあり、特徴であるコンクリート打ちっばなしの建物なども、近未来を演出できるということで注目されている。昭和の素朴な街並みと宇宙人が降り立ちそうな近未来の建造物が混在する、ロケ地としては非常にユニークな素材がある島だと言える。

③ 神戸との協調——映像制作における相乗効果

津守氏が、これまでに携わった作品の中で特に印象深いものとして、映画『夏の終り』（2013 年）がある。この作品は、当初、神戸や加古川でロケが行われたが、昭和の街並みを求め、神戸 FO の紹介で、スタッフは淡路島へ移動した。撮影では、駅舎や高架下のシーンが必要だったが、淡路島には鉄道が通っていないため、監督は洲本市内の古い町並みを見て、ここを駅舎や高架下に見立てることを決定した。駅から階段を降りる場面や、街並みを歩くシーンなどが撮影された。他にも棚田や食堂でロケが行われた。島内外の約 90 人がエキストラ出演もした。神戸からだとも一時間もかからずに淡路島にわたることができ、神戸とはまた情緒の違う場所がたくさんあり、映画に深みを与えることができる。また、こういった連携があると、制作者にとっては何度も説明をしなくていいメリットもある。

④ 海外映画誘致と地域経済への恩恵

撮影支援に難題はつきものだと言津守氏はいう³⁷。これまでで一番大変だった撮影支援は、ハリウッド作品である『ロスト・エモーション』（2015 年）を挙げた。これは『ブレードランナー』（1982 年）のリドリー・スコットがプロデュースした近未来をテーマにした作品である。淡路島 FO には制作者から「安藤忠雄建築で撮影したい」と直接、連絡がきた。選ばれたのは淡路夢舞台という 2010 年にオープンした複合施設であった。また集団生活のシーンが多くあり、淡路島 FO に外国人エキストラを用意してほしいという要望があったが、淡路島内だけでは集められず神戸 FO にエキストラ照会をお願いして集め、さらには劇団事務所に問い合わせ、最後は日本人も含めてなんとか集めたそうである。また、俳優やスタッフの宿泊のための施設もそんなに多くはないので、さまざまな施設にお願いし、宿を確保するなどした。他にも、日本映画の制作とは違い、ハリウッドでは撮影中の食事はケータリングが一般的である。お弁当というわけにはいかず、ケータリングの手配を撮影場所に隣接するホテルや島内の業者に掛け合い準備したという。大規模作品を支援する際には、島という立地では、こういった様々な課題があるが、神戸 FO などが近くにあり、広域で協力することが決まっているからこそ、スムーズに支援ができる。また、地域には経済効果がもたらされる。海外作品を誘致することで、広告費を使わずに、淡路島

³⁶ 「(十人「島」色) 津守会美さん 40 歳 淡路島フィルムオフィス・コーディネーター」朝日新聞 2016 年 9 月 30 日 朝刊(淡路) 31 頁。

³⁷ 2025 年 1 月 23 日の本人インタビューにて。

の魅力が海外に発信されるのはインバウンド効果をもたらすためにも大きな戦略である。

(2) 淡路島 FO と映画を通じた地域活性化の独自の取り組み

① 地域社会との共創関係

淡路島では、映画の撮影が行われると、地元の人々は喜び、その姿を見ることが津守氏にとって最大のやりがいとなっている。地元住民から「映画の撮影をやっているんだね」と声をかけられることが多い。そんなに広くない島での撮影は噂がすぐに広まる。しかし、ほとんどの人が嫌な顔ひとつせず協力してくれる点が、淡路島の住民の魅力だと津守氏は語り、例えば、「昨日の夜、主役の人が居酒屋におったよ」³⁸と聞かされることもよくあるという。ところが、俳優だと気づいても、島民は声をかけないらしい。気持ちよく撮影し、淡路島を楽しんでもらえることが地元の人の喜びになっているそうである。特に、近年パナソニックグループが淡路島に進出してから、協力的ということもあり、より撮影に対する体制が整い、誘致がしやすくなったという。また、パナソニックグループには、2次元コンテンツをテーマとした「ニジゲンノモリ」³⁹もあり、淡路島と映画やドラマなどが結びついている⁴⁰。しかも、2025年4月から始まるEXPO2025大阪・関西万博には、パナソニックグループも出展予定であるが、建物外観がアンモナイトのらせん形状となり、万博終了後は淡路島に移設する予定であるという⁴¹。こういった機会も大いに活用できるはずである。映画ロケ地の誘致に繋がればいいのではないかと考える。

② 淡路島 FO などが手掛けた映画作品とイベント

淡路島 FO は、映画ロケ地の誘致以外にも様々な地域活性化の取り組みを続けている。2016年、淡路島全体の魅力を発信しようと、淡路島観光協会、淡路島 FO、淡路青年会議所などで構成された実行委員会が発足した。その活動の重点として、淡路島の銭湯を舞台に人間模様を描く映画『あったまら銭湯』(2016年)が制作された。『あったまら銭湯』は、淡路市岩屋に存在する銭湯を舞台に、常連客である主人公の不器用な恋愛模様を描いた作品である。監督は、淡路市・洲本市出身の映画監督であり、京都市の映像制作会社「海空」の代表である大継康高氏である。主人公を演じるのは、淡路市出身の俳優、笹野高史氏である。ヒロインはオーディションで、地元出身の中学生が選ばれた。本作では、淡路島の美しい海の景色はもちろん、生しらす丼などの郷土料理や、人々の温かさなど、島の特色を前面に押し出すことを意識して制作された⁴²。映画制作と並行して、実行委員会では「海の映画館を作ろう」プロジェクトを企画し、洲本市の大浜海水浴場に巨大なスクリーンを浮かべ、砂浜から映画を楽しむ「うみぞら映画祭」⁴³を開催し、完成した映画も上映された。この映画祭はコロナ禍を乗り越え、2025年も継続開催が予定されている。

③ 淡路島 FO の独自の発信活動と地域振興

淡路島 FO は、他にも独自の発信活動を積極的に行っている。2022年にNHKの「ブラタモリ」で淡路島が放映された反響を受け、「はじまりの島 淡路島をぶらぶら歩こう」

³⁸ 2025年1月23日の本人インタビューにて。

³⁹ 「ニジゲンのモリ」サイト <https://awajishima-resort.com/shop/nijigenomori/> (2025年2月13日閲覧)

⁴⁰ これまでに「クレヨンしんちゃんアドベンチャーパーク」や「ゴジラ迎撃作戦〜国立ゴジラ淡路島研究センター〜」などアニメや実写作品のコンテンツのアトラクションなどを誘致している。前掲注39・「ニジゲンのモリ」サイト (2025年2月14日閲覧)。

⁴¹ 「クローズアップ：大阪万博、目玉は中身は しぼんだ人気「行きたい」4割 開幕まで2年」毎日新聞2023年4月14日 朝刊3頁。

⁴² 「映画撮って、あたたまる 淡路島が舞台、ヒロイン公募」朝日新聞 2016年1月14日 朝刊29頁。

⁴³ 「うみぞら映画祭2025」サイト <https://umizora-cinema.com/> (2025年2月13日閲覧)

と題したロケーションガイドブックを作成した⁴⁴。淡路島の歴史を紹介する「歴史編」では、古事記に関して淡路島が「日本で最初に生まれた島」とされる国生み神話を紹介し、伊弉諾（いざなぎ）神宮などの関連スポットを掲載。「地質編」では、淡路島の地形の成り立ちをはじめ、阪神・淡路大震災の震源となった野島断層や、鳴門の渦潮について取り上げている。さらに、産業編では、淡路瓦や玉ねぎなど、地域特産品を紹介。観光からの視点だけではなく、歴史を知ることから、島自体に興味を持ってもらうことで、地域活性化につなげるということである。また、2023年にはサンテレビで放映中のドラマ『稲妻ムービーマーケット』のロケ地マップも作成した。マップにはロケ地となった洲本市の映画館・洲本オリオンや大浜公園などを写真付きで紹介している⁴⁵。

映画ロケ地を誘致するだけでなく、地域をいろんな側面から活性化する取り組みこそ、映画誘致へと繋がり、それがさらに大きな作品を呼び寄せることになるということだろう。

3章 海外作品の事例——撮影支援環境の多様性

日本でのフィルム・コミッションの取り組みと比較する意味で、近年のアメリカおよび、その周辺のフィルム・コミッションではどのような支援体制があるのか。ニューヨークとカナダのケベック州の事例と、日本国内でも進んでいる助成などを記しておく。

(1) ニューヨークとケベック州の事例——映画制作支援制度と誘致戦略

① ニューヨークで盛んにロケが行われている理由

まず、ニューヨークの場合である。映画『バニラスカイ』（2001年）の冒頭シーンでは、トム・クルーズ演じる主人公がマンハッタンを車で運転し、タイムズスクエアに到着する。しかし、そこは通常、観光客やタクシードライバーで混雑するニューヨークで最も騒がしい場所であるにもかかわらず、完全な無人状態となっている。この光景は、主人公の悪夢として描かれている。しかし、マンハッタンをよく知る者ならば、それがいかに現実離れしたシチュエーションであるかが容易に想像できるだろう。驚くべきことに、このシーンはコンピューター処理による映像ではなく、2000年11月のある日曜日の朝、実際にタイムズスクエアで撮影されたものである。5番街から9番街にかけての57丁目からタイムズスクエアまでの道路を完全に遮断したのは、ニューヨーク市のフィルム・コミッションである。当然、車両だけでなく、地下鉄やホテルの出入口から人が出入りすることも防がなければならない。この撮影を成功させるには、フィルム・コミッションの強力なリーダーシップと警察の協力が不可欠であった。ニューヨークのフィルム・コミッションはニューヨーク市長直属の独立組織である。その役割は、単に撮影許可を管轄する他の部局への根回しを代行することにとどまらず、「許可」そのものを発行する権限を持っている点に特徴がある。さらに、ニューヨーク市には、映画やテレビ撮影専用の警察部隊である「映画・テレビ班」という特別ユニットがあり、30名以上の警察官が所属している。このユニットは、フィルム・コミッションと連携し、交通規制などの撮影支援を完全無償で行っているのである。このように、ニューヨーク市全体が映画撮影に協力する体制を整えているため、毎年何百本もの映画がニューヨークを舞台に撮影され、結果として同市の観光資源としての価値も向上している⁴⁶。

② ケベック州のフィルム・コミッションの取り組み

次に、海外のフィルム・コミッションの成功例として、近年、アメリカからの撮影支援

⁴⁴ 「淡路島ロケ地、ぶらぶら歩こう フィルムオフィス。ガイド本作成」朝日新聞 2022年7月6日朝刊（淡路）23頁。

⁴⁵ 「洲本で体感「稲妻ムービーマーケット」ロケ地マップ 朝日新聞 2023年6月19日朝刊（淡路）17頁。

⁴⁶ 「米国フィルム・コミッションに学ぶロケ協力への「観光・経済効果」 週刊エコノミスト 2002年6月11号84～85頁。

を多く受けているカナダ・ケベック州のモントリオールを挙げる。かつて、この地域で撮影される映画やテレビ作品の80%は地元のプロダクションによるものだったが、現在では40%が海外プロダクションによる撮影となっている。アメリカから4時間圏内、英語が通じるなどの利点があり、アメリカの制作者がよく訪れる。モントリオールは、ニューヨークと見間違えるようなエリアを持ち、パリのシーンを撮影することも可能な多様なロケーションを有する。加えて、空港からわずか5分の場所に、北米最大級のサウンドステージを備えたスタジオが設立されている。さらに、地元の撮影スタッフの技術は高く、特に雪を扱う技術に関しては世界一との評価を受けているそうである。ケベック州が海外プロダクションを惹きつける理由は、地理的利便性だけではない。同州では、複数の都市が連携して撮影支援を行う体制を整えている。例えば、プロダクションがケベック州での撮影を希望する場合、フィルム・コミッションに問い合わせを行うと、モントリオール、ケベックシティを含む4都市のコミッショナーが会議に参加し、それぞれの都市の特性を提示する。このように、単独の都市ではなく、州全体が連携することで、撮影に最適なロケーションを提供するシステムが確立されている。特にケベックシティは、都市規模が小さく撮影許可を得やすい点が強みである。さらに、ヨーロッパまでの渡航費をかけることなく、中世の街並みや古城を撮影できるという大きなメリットがある。フィルム・コミッションの関係者によれば、経済効果を生み出すことと、地元住民への影響を最小限に抑えることのバランスが、成功の鍵であるという⁴⁷。

以上のように、ニューヨークやケベック州におけるフィルム・コミッションの取り組みは、映画産業において極めて重要な役割を果たしている。撮影支援体制の整備と柔軟な対応が、都市の経済的利益と文化的価値の向上に大きく寄与しているのである。

③ 日本における海外作品の誘致体制

近年、日本ロケを望みながら、残念ながら誘致に結び付かなかった作品がある。ひとつは、2023年公開になったトム・クルーズ主演の『ミッション：インポッシブル/デッドレコニング PART ONE』がある。制作費は380億円という作品で、日本ロケが検討されたが、映画制作費の一部の補助や税の免除などのインセンティブ、許認可の問題から断念し、イタリアのヴェネツィアでの撮影となった。また、2016年に公開された、遠藤周作原作、マーティン・スコセッシ監督の『沈黙 - サイレンス』は長崎が舞台であり、2007年ごろからロケハンなどを実施した。ところが、国を挙げて支援を表明した台湾で全編を撮影することになった⁴⁸。こういった反省を受けて、国内でも2022年度から「海外制作会社による国内ロケ誘致等に係る支援」を開始し、海外制作会社による国内ロケ撮影などの制作費支援を実施している。その第一号は、インド映画の『Ek Din (One Day)』で、撮影が2024年に札幌市、小樽市などで行われ、札幌フィルム・コミッションが支援した⁴⁹。ボランティアエキストラも出演し、2025年に日本でも公開予定という。2023年以降も様々な映画が採択され、日本での撮影を行っている⁵⁰。

⁴⁷ 谷川健司「北米のフィルム・コミッション事情」 キネマ旬報 2003年8月上旬特別号118頁。

⁴⁸ 関根 留理子「ロケ誘致が促す経済効果と社会的効果」日本国際映画著作権協会サイトより https://www.jimca.co.jp/images/MPA2023/JFC_JP.pdf (2025年2月14日閲覧)。

⁴⁹ 「コンテンツ海外展開促進・基盤強化事業費補助金（映像制作等支援）「海外制作会社による国内ロケ誘致等支援」における補助対象作品を決定しました！」 経済産業省 サイトより https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/contents/kokunairokeyuuchi.html (2025年2月14日閲覧)。

⁵⁰ 「我が国の文化芸術コンテンツ・スポーツ産業の海外展開促進事業費補助金（コンテンツ産業の海外展開等支援）「海外制作会社による国内ロケ誘致等に係る支援」の応募における補助対象作品を決定しました」経済産業省サイトより https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/contents/kokunairokeyuuchi_1.html (2025年2月14日閲覧)。

おわりに

神戸 FO を中心に、映画撮影を取り巻く環境を検証してきたが、いくつかの課題もある。土屋氏の話によれば、一例として、撮影終了後にロケ地の痕跡が残らないケースである。例えば、2023 年に神戸で撮影された配信ドラマの後に映画公開となった『シティ・ハンター』では、神戸の都市開発と発展を支えた産業遺産の一つである「ベルトコンベヤトンネル」(2005 年閉鎖)で撮影が行われた。この撮影には設営なども含め 4 カ月を要したが、撮影終了後にはセットが撤去され、ロケ地としての形跡は残らなかった。この作品の誘致で 1 億円以上の経済効果を生み出したが、映画の舞台となった場所を観光資源として活用することは、管理上の問題から存続が困難な状況にある。そのため、作品を鑑賞しロケ地を訪れたいと考える観客がいても、現地を目にすることができない。観光資源としての可能性を秘めながらも、やむを得ず取り壊され、長期的な活用が難しいのが現状である。また、作品の画像や映像に関する権利上の問題により、フィルム・コミッションが映画の宣伝に活用しづらいという点もある。さらに、観光公害(オーバーツーリズム)を防ぐ目的で、制作側がロケ地を公表しないケースも見られる。例えば、新海誠監督の『すずめの戸締まり』(2022 年)では、神戸(と思われる場所)が登場するが、神戸 FO がサポートはしなかったため、ロケ地の宣伝などが難しいということがあった。

また、土屋氏に聞いたところでは、これまでに神戸 FO が支援した作品の数は 3,000 件を超えるという。しかし、実際の地名として登場することは少ない。たとえば、『新宿インシデント』(2011 年)では、神戸の名所で多数のシーンが撮影されたが、劇中ではタイトル通り「新宿」として描かれ、神戸の名が直接登場することはなかった。シビックプライドを考慮すると、神戸が「神戸」として登場することが望まれていることであろう。それに対し、神戸 FO は新しいチャレンジも始めている。2 年前から、シナリオハンティング(脚本家がロケ地を視察する活動)を行う人々への助成を開始した。脚本家を神戸に招き、ロケ地として適した場所を実際に見てもらうことで、神戸を舞台とした作品が生まれる可能性を高めようという取り組みである。具体的には、物語の企画イメージなどが採択されたシナリオ作家に神戸への交通費および宿泊費を助成し、神戸に滞在しながらオリジナルのシナリオを考案してもらう。助成上限はシナリオライター 1 人なら 15 万円、シナリオライターに加えて監督など複数人なら 20 万円。これまでに年間 2~3 人が採択されており、「神戸が舞台として登場する作品を増やしたい」と話している⁵¹。2024 年、まだ映画化された作品はないが、今後に期待しているという。

他に、神戸が「神戸」として映画に登場する機会を増やすことはできないだろうか。そのためには、神戸 FO だけでなく、産官民が対話の場を持ち、市民が主体的に街づくりに関与する機会を増やすことは重要ではないだろうか。例えば、市民が自らの街をより良くするための意見を出し合う会議を設け、ボトムアップ型の取り組みを推進することは有効な手段となるように思う。このような取り組みが実現すれば、市民の街への愛着は一層深まり、街づくりへの参加意識も高まるだろう。市民が主体となって街をつくる意識を持つことで、その街が映画の中で映し出されたときの喜びは一層大きなものとなるはずだ。街づくりから始める撮影支援はどうだろう。これまで培ってきた実績を活かし、映画制作の支援を継続しながら、神戸の魅力を国内外に発信していくことが、今後の神戸 FO の役割として求められている。

これまで考察してきたように、神戸 FO の役割は、単に撮影許可を発行することにとどまらない。撮影が行われる都市の特性を深く理解し、道路一本一本に至るまで詳細な知識を有することはもちろん、プロダクションの視点に立ち、より効果的な撮影方法を提案する判断力が求められる。神戸 FO は設立当初からこの視点を持ち、実際に大規模な撮影支援を成功させてきた。例えば、制作者から一見不可能に思える要望が寄せられた場合でも、単に「無理です」と断るのではなく、撮影の実現可能性を模索し、代替案を提示する姿勢

⁵¹ 「シティ・ハンター」「あぶない刑事」…映画・ドラマの神戸ロケ、経済効果は初 4 億円超

産経 WEST 2024 年 8 月 1 日

<https://www.sankei.com/article/20240801-SA3X65EABNNJHHXMLWN3MXUNAQ/> (2025 年 2 月 14 日閲覧)。

を持っている。こうした柔軟な対応により、神戸 FO は継続的な経済効果を生み出してきた。また、神戸 FO の成功の背景には、経済効果や観光誘致よりも「市民優先」という理念がある。この点は、神戸に根付くシビックプライド（市民の地域に対する誇り）と密接に関連しており、筆者自身も神戸での仕事を通じて強く実感している。市民が自らの街を誇りに思い、その思いが撮影支援の成功を支えているのである。土屋氏も「私たちが撮影支援で成功しているのは、市民の皆さんの力です」⁵²と述べている。

さらに、忘れてはならないのは、神戸 FO の成り立ちが、阪神・淡路大震災の復興と密接に関わっていることである。震災によって深い傷を負った神戸は、その復興の姿を発信し続けることを原動力としてきた。こうした思いのもと、現在もその思いを発信し続けている。神戸 FO は、阪神・淡路大震災から 30 年を迎える 2025 年 1 月 17 日より、震災をテーマとした映画「その街のこども 劇場版」の再上映イベントを主催した。このような活動が、市民の間に深く浸透していることは疑いようがない。こうした取り組みを通して検証してみると、神戸 FO の成功は、結果として、阪神・淡路大震災という未曾有の大災害がもたらした側面でもあると考えられる。「元気になった神戸を見てほしい」という撮影支援の意図が広く浸透し、街の復興と発展を願う市民のシビックプライドを育むとともに、制作者にとっても創作活動に適した環境を形成した。経済効果の重要性は否定できないが、それを超えて「人々に喜びや希望を届けたい」という思いが根底にあったことが、成功の本質的な根幹をなしていると考ええる。この事例は、経済的・産業的な成功にとどまらず、文化的価値の共有と地域社会の結束、両面がいかに重要であることを示している。

⁵² 2024 年 10 月 25 日インタビューより。